
2008年を迎えてー「終着点」と憲法

山本 晴義 (校長)

1

昨年(No. 27)の「2007年を迎えて」で私は、アメリカの中間選挙でブッシュ政権が大敗し、ジェイコブ・ワイズバークが言うようにブッシュの「新自由主義(福祉の削減、市場万能、規制緩和、資本の競争強化、格差の拡大)的なグローバリズムの支配の連合が壊れ、理念も消え、終着点に来ている」と述べ、そしてこのような世界の流れにあくまでも逆行してブッシュに追随し、戦後日本の歩みを、占領軍に「押しつけられた」憲法とそれにもとづくものだと否定して、「戦後レジームからの脱却」、憲法改正、「靖国ナショナリズム」を叫ぶ安倍晋三政権に対して、この「戦争のない世界」への“さきがけ”になろうとした60年前の日本国憲法の歴史的・思想的な意義をきっちりとおさえる必要があることを強調しました。

私がその後得たことのポイントを、すでに発表した拙論と重複する箇所もありますが、簡単に書きたいと思います。

2

たしかに敗戦後、占領下日本の最高権力者は連合軍最高司令官(GHQ)であり、新憲法制定の決定権を持ったのはGHQであったが、いろいろの資料をあたる中で、私が一番興味を持ったのはGHQ・民生局の次長チャールズ・ケディス大佐でした。なぜなら彼は日本の非軍事化と民主化、憲法改正の中核であった民生局の中で、最も戦闘的な「ニューディーラー」の一人だったからであり、またハーバード大学出身の法律家、弁護士で、あの国際連盟を提唱したウィルソン大統領の時代、国民的に高揚した弁護士サルモン・レヴィンソンや哲学者ジョン・デューイらの「戦争非合法化」運動(1921年設立)、反戦・平和運動やその結果、28年成立した「不戦条約」を体験している人だからです。「戦争非合法化」論というのはすべての国民自身が、あらゆる戦争という行為を犯罪として廃絶することであり、これこそ憲法9条の精神に外ならないからです。

ニューディール政策というのは、私がおも

もすぐれたアメリカ大統領だと思ふフランクリン・ローズベルトが、1929年の大恐慌の中で行った失業救済事業、産業の組織化、農産物価格支持、医療保険、退職年金、失業保険などの社会保障制度、さらにワグナー法（1935年）に見られる様に労働者の組織権・団体交渉権や最低賃金と最高労働時間を保障し、はげしい資本の反対の中で労使関係の転換をやった「リベラリズム」「アメリカ型社会民主主義」です。これが世界史上でも人権を市民的・政治的権利（選挙権、思想言論、出版、集会、結社の自由）だけでなく、国民の生存権と社会保障をうける権利と規定した先駆的な日本国憲法第25条です。

もちろんこれらの平和と民主主義の精神はケーディスやGHQのニューディーラーによって単に押しつけられたものではなく、日本人300万人を越える死者と惨禍、国土の荒廃と飢餓に瀕した国民のはげしい願望があったし、それに民生局のメンバーは高野岩三郎、森戸辰男や鈴木安蔵ら民間のすぐれた「憲法研究会」の草案を熱心に吸収しました。

3

1945年4月12日、ローズベルトが死亡して、もともと反ソ・反共の立場から議会内保守派であったトルーマンが大統領になってからワグナー法に代わってストの抑制、共産党排除のタフト・ハートレー法（1947年6月）が成立し、47年3月、例の「トルーマン・ドクトリン」と冷戦化をすすめました。吉田内閣の48年ごろGHQ内部の対立も先鋭化し、民生局中心の改革派に代わって、参謀部の冷戦派の軍人が中心となりました。ケーディスも48年帰国し、辞任しています。

もっとも、他方注目する必要があるのは、30年代以後、ソ連では、あのいまわしいスターリン主義が支配し、スターリンはソ連共産党をモデルとし、コミンテルン全体を「単一の共産主義世界政党」として統合しようとしたことで

す。「一枚岩主義」、資本主義の「全般的危機論」、社会民主主義に対する「社会ファシズム論」、共産党指導の武装蜂起による「プロレタリア独裁の樹立」などが教条化されました。ローズベルト政権やニューディール政策は「アメリカ版社会ファシズム」だときめつけました。1935年、コミンテルン第7回大会で決定された画期的な「反ファシズム統一戦線・人民戦線」政策は発展しませんでした。要するに戦後の冷戦時代は、米ソの自国中心主義的な陣取り合戦でした。終戦の翌年（1946年6月）労働運動は労働組合の組織率41・5%まで爆発的に高揚しましたが、その後労働運動にしても、平和運動にしても常に国際的なコミンテルン方式にみられるように教条主義・権威主義やセクト主義がはびこり分裂や対立をくりかえしました。

周知のように朝鮮戦争をつうじて、わが国の保守勢力は、アメリカとの軍事同盟のもとで、改憲・再軍備をめざし、「逆コース」をおしすすめます。と同時に「特需ブーム」を転機にわが国の資本主義は1955年ごろから70年代にかけて、重化学工業を中心に高度経済成長をもたらし、新しい耐久消費財の大量生産・大量伝達・大量消費による「生活革命」、「新中間層」の増大（一億総中流化）、「福祉国家」化の進展とともに、「脱工業化」、社会の平準化、大衆社会化が拡大しました。そして、この果てしのない大量生産と大量消費は次第に崩壊し、産業廃棄物・排気ガス・廃液の放出による環境汚染、さまざまな公害病を生みだし、また資源の浪費をもたらしました。こうして基地反対闘争、安保闘争、原水爆禁止運動のみならず、反公害闘争、消費者運動、環境保護運動や革新自治体をつくる運動など、市民の新しい「日常生活世界」における闘いが、世界の先進資本主義国でおこりました。そのほか第三世界の国際的なベトナム戦争反戦運動が「既成左翼」政党や労働組合から独立に、例えば「ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）」として発展したし、管理社会化された

大学に対する「スチューデント・パワー」、さらにソ連をはじめとする国権主義的な「社会主義」諸国や「旧左翼」に対する「異議申し立て」「ニューレフト」が高揚しました。私はすでにいろいろなところで書きましたが、今までのコミンテルン方式、一元論的な方式では妥当せず、「世界システム」における「国家」と「市民社会」の力関係が大きく転換し、政治と言えば、もっぱら「国家」（国家権力）あるいは「階級闘争」をめぐる問題（政治革命）だと考えられていたのが「社会」のさまざまな領域で大衆の多様な諸集団による「ライフスタイルの政治」（社会革命）が、21世紀に向かっての「新しい社会主義運動のパラダイム」だと考えます。

4

1月8日から始まったアメリカ大統領選挙予備選で、テレビや新聞は、予想外にアフリカ系（黒人）で「変革」を掲げ、「核兵器のない世界を追求する」と演説し、反戦・平和やマイノリティの市民運動に支えられたオバマ候補が健闘していることを伝えています。例の「サブプライムローン」の破たん、株価の低落、原油の暴騰で世界の圧倒的な覇権をにぎってきたドル離れがすすみ、「ドルの時代の終焉」をもたらしています。ブッシュの「最後の盟友」と呼ばれていたオーストラリアのハワード政権が倒れ、イギリスのブラウン政権とともに、新ラッド政権もイラクからの部分撤退を表明し、今やブッシュの単独行動主義・先制攻撃主義は完全に孤立し、行き詰まっています。

昨年7月29日、かぎりなくブッシュ路線に追随して改憲、靖国ナショナリズムをめざした安倍内閣が参議院選挙で大敗し、9月12日、突然辞任表明して政権を投げ出しました。異常な大企業擁護のもとで、日雇い派遣、人間としての尊厳を奪う雇用の破壊がすすみ、憲法第25条の国民の暮らしの支えである社会保障から多くの人々が排除され、命と健康が脅かされて

います。この貧困と不安の上に何兆円という基地移転費用、ミサイル防衛網、軍事利権汚職、今回のやはり憲法違反の新テロ特措法の強行があるのです。

言うまでもなく、もうこのような現実はいま冒頭で述べたようにブッシュ政権や福田内閣の新自由主義的なグローバリズムの支配が、明らかに世界の流れの中で「終着点」に来ていることを示しています。

9月、高校日本史の教科書検定、沖縄戦の「集団自決」に対する「日本軍の強制」についての11万6千人の県民大会、12月にかけての名護市、岩国市、座間市の米軍基地反対闘争、原告らの命がけのたたかいと国民世論で勝利した薬害肝炎救済法……。国際的にもアメリカの新自由主義と決別し、共同と連帯に基づく地域統合をめざすラテンアメリカ諸国の発展、核兵器も大量破壊兵器も存在せず、平和と安定を志向する共同体をめざすA S E A N（東南アジア諸国連合）とT A C（東南アジア友好協力条約）の飛躍的な発展、E Uの新基本条約設立によるヨーロッパ統合の新段階。それにアメリカ、カナダと日本が厳しく責任を問われた、国境を越えた21世紀の人類共通の課題である地球温暖化防止のためのパリ会議等々。私は、大阪哲学学校は今年も、日本国憲法をさらに発展させるためにも、これら、多元的な平和と民主主義のたたかいの研究と学習を深めていかねばならないと思っています。



現代・近代民主主義の思想的・倫理的特徴は何か、 の視点からみた『リヴァイアサン』（ホッブズ）と『自然権と歴史』（レオ・シュトラウス）の読書ノート

藤田 隆正（会員、運営委員）

このノートは厳密な解釈や研究論文を目的にしたものではない。ましてや私独自の見解をのべたものでもない。あくまで私の関心から、「自然権と歴史」のホッブズ理解を私なりにまとめたものである。

『自然権と歴史』によれば、現代の民主主義思想は、古代ギリシアの民主主義思想とは異なる考えの上に成り立っている。それは次の4点にある。

- ①善いことと快いことのいずれを価値として認めるか、
- ②自然的正は存在するか、どうか、
- ③人間の本性は、社会的・政治的か、または非社会的・非政治的か、
- ④人間存在を根源的に規制するのは理性か、情感か、

この4点において両者は、ことごとく反対の立場にある。

(1) 『自然権と歴史』における

古代ギリシアの民主主義思想の特徴

1) 古代ギリシアの代表的思想家たち（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）は、快樂主義を批判し善に最高の価値を認めた。善は本質的に、快いこととは異なり快いことより一層根本的である。

2) 人間を動物から区別する、人間固有の働きは理性（知性）を働かせ思慮深く行為することである。

善き生とは、人間の自然的傾向性の要求が、理性の働きによって陶冶され可能なかぎり最高度に目覚めた魂にもとづく生である。

すなわち、善き生とは人間的自然の完成態である。その生は人間的卓越性ないし徳の生であって、一流の人の生で、快樂としての快樂を求め生ではない。

3) アリストテレスの「人間は社会的動物である」に代表されるように、人間は本性的に社会的存在である。人間は他の者と一緒でなければ生きていけない。あるいは善く生きてゆけないように作られている。

人間の社会性というものは、快樂の計算から生じるのではない。人間は他者との交わりから快樂を得るのである。愛・情愛・友情・憐れみは、自分自身の利益に対する関心や、

何が自分自身の利益に役立つかの計算と同じぐらい人間にとって自然なものである。この人間の自然的社会性こそ古代ギリシアの代表的思想家たちの根拠である。

すなわち、人間は他のいかなる社会的動物よりも根源的な意味で社会的である。人間性それ自体が社会性なのだ。

4) 人間の本性は、国家社会において自己の完成態に達する。人間は自分の低級な衝動を抑え込むことなしに、自らの人間性の完成にいたりえない。また、人間本性の完成は国家社会における受動的な構成員であることにおいて実現されるのではなく、政治家、立法者などとして活動することにおいて実現する。

5) 古代ギリシャの代表的思想家たちは、道徳

的事柄や政治的事柄を人間本性の完成という観点からみたので、人間の平等主義をとらない。なぜなら、すべての人間が人格的完成へ向かって進む自然本性を平等に持っているのではない。またすべての自然本性が善い自然本性でもない。

普通の人々のなかには、他者の導きを必要とする人、必要としない人がいる。自然的資質も違ふし、熱意も異なる。このように、人間は人間的完成という決定的な点において同等ではないから、すべての人間に平等な権利はない。ある人は他の人より優れており、他の者たちの支配者である。

6) 人間は、その最高の高みに達するためには、最善の社会人間的卓越性に最も役立つような社会に生きねばならない。古代ギリシアの代表的思想家たちは最善の社会を最善のポリティアとよんだ。このようによぶことによって彼らが示したことは、まず社会が善きものであるためには、それは国家社会ないし政治社会でなければならず、事物の管理のみならず人間の統治が行われている社会でなければならないということである。

最善の体制とは、最善の人々が、常に統治する体制、すなわち、優秀者支配制のことである。

7) 最善の社会は、各人に最も適した仕事と役割を割り当て遂行させ、その功績に応じた褒章を与える。社会的位階は功績のみに対応する。したがって、都市国家の正義とは、「すべての人がその能力に応じて与え、その功績に応じて与えられる」ことである。

(2) 『自然権と歴史』における現代民主主義思想の源流としてのホッブズ

イ、権利

ピューリタン革命は、イギリスにおける市民社会形成史上、画期的な出来事であった。この革命のさなか、激動を目のあたりにしながら、新しく生まれつつあった市民社会の基礎原理を

あきらかにしたのがホッブズである。

ホッブズは『リヴァイアサン』の第6章で、人間の生活を「生命的運動と動物的運動」にわけていう。「動物には二種類の、彼らに特有の運動がある。ひとつは生命的 vitell なものと呼ばれて、出生においてはじめられ、全生涯にわたってたえることなく継続される。血行、脈拍、呼吸、消化、栄養、消化、栄養、排泄など……。もうひとつは、動物的 Animal 運動であつて、意志による運動とよばれ、我々の心の中で想像されたようなやり方で、行き、はなし、四肢のどれかを動かすことなど」である。とくに、後者の動物的運動（この場合のアニマルというのは生氣＝精神をもったものという意味）は、意志が欲求と嫌悪によつて、なわち利益＝快楽をもとめ、害＝不快をさけて運動する。

彼の意志とは、生存への意志である。欲求と嫌悪も、生存にとって有利のものと有害なものである。

意志は欲求から生じ理性の働きとは別である。すなわち人間は、理性的存在ではなく情念的存在である。善とは、欲望が求める対象であり、悪とは嫌悪の対象である。

このように、ホッブズは、人間をありのままの自然の欲求に従って生きる存在ととらえるところから、彼の政治・哲学・倫理を出発させる。善悪の価値もこの欲求によって決められていく。

「《善・悪》しかし、だれかの欲求または意欲の対象は、どんなものであつても、それがかれ自身としては善とよぶものである。そして彼の憎悪と嫌悪の対象は悪であり、彼の軽視の対象は、つまらないとるにたらないものである。善悪、軽視すべきという語は、つねに、それらを使用する人格との関係において使用されるのであつて、……善悪についての共通の規則もない。」「対象自体の性質から導き出される善悪の普遍的基準といえるようなものはない。」

このように、善悪の基準は主観的で、個々人が善悪の究極の審判者である。

快樂についていう。

「人間は自然のままではたんに感覺的な生物であるから、自分たちにとって最大の快樂を欲し、また恐怖に駆られて迫りくる危険を避けようとし、あるいはこれに根強く抵抗する性質をもっているが、このゆえに人間性そのものを悪と考えるてはならない。」

ようするに、ホッブズは個人の欲求を唯一の価値原理とし、情念的存在としての人間を、否定的に原罪として捉えるのではなく、大胆に肯定的に捉えたのである。

彼によれば、快樂（あるいは喜び）は善の現象あるいは感覺であり、邪魔あるいは不快は、悪の現象あるいは感覺である。

したがって、すべての欲求、意欲、愛好は、多かれ少なかれ、ある喜びを伴い、すべての憎悪、嫌悪は、多かれ少なかれ不快と立腹をとまなう。

心の快樂は《たのしみ》で、不快のうちにあるものは《苦痛》である。

「欲求・意欲・愛好・嫌悪・憎悪・たのしみ・悲嘆とよばれる、これらの単純な情念は・・・多様化される」として、希望・絶望・恐怖・勇氣・怒り・確信等々についてのべ、情念の倫理学とよべるものを展開している。

この倫理学でホッブズは、善を至高の位置からひきおろし、人間の目的から、追放した。

そのことは、彼が権利・正義、自然法の根拠を、善という人間の最終目的ではなく、生きている人間のうちに求めたことを意味した。生きている大多数の人間にあって、殆んど四六時中最も力強く働いているものは、理性ではなく情念である。

あらゆる情念のうちで最も強力なものは死の恐怖である。なかならず他人の手にかかる暴力死である。自然におとずれる死ではなく、暴力によって死すことである。人間の恐怖の中で最大の恐怖である暴力死への恐怖が、すべての自然的欲望のうちで最も強力で基本的な欲望であ

る根源的の欲望・自己保存欲を最も力強く表現している。

この自己保存欲こそが権利、正義、自然法、道徳の唯一の根源である。

すべての義務は自己保存という基本的で譲渡できない権利から派生するのである。したがって絶対的無条件な義務というものには存在しない。義務が拘束力をもつのは、義務の遂行が我々の自己保存を脅かさないうちにおいてである。

自己保存の権利のみが無条件的・絶対的である。本来的にいって、存在するのは完全な権利であって、完全な義務というものは存在しない。基本的で絶対的な道徳は、権利であって義務ではない。

それゆえ、国家社会の役割と限界とは人間の自然的権利によって規定される。国家の有する役割は、古代ギリシアの代表的思想家たちのように、有徳的生活を生み出しそれを促進することではない。各人の自然的権利を保護することである。

義務とは区別された人間の権利を、政治の基本的原理とみなし、国家の役割は人間の権利を安全に擁護する点にあるとする政治理論を、民主主義とよぶならば民主主義の創始者はホッブズである。

古代ギリシアの代表的思想家は人間の義務を教えた。彼らは人間の権利は本質的に人間の義務から派生すると考えた。自然的義務による方向づけから自然的権利に基づく方向づけへの基本的な転換は、ホッブズの思想の中に最も明瞭に表現されている。ホッブズでは義務はただ条件付のものとなった。

古代ギリシアの代表的思想家たちのいう人間の義務に基づいて規定される社会的秩序の実現はユートピア的にすぎず、実現不可能である。

他方、人間の権利に基づいて規定される社会的秩序の場合は全く異なる。なぜなら人間の権

利は、各人が現実に欲求しているものを表しているから。それらの権利は各人の自己利益を聖化しているものである。

人間は自分たちの義務を果たすときよりは、自分たちの権利のために戦うときの方が革命的である。彼の理論が市民革命の原動力となったことが理解できる。

もし、すべての人が本性的に自己保存の権利を持つならば、自己保存に必要な手段への権利も必然的に持つことになる。では、いかなる手段が人間の自己保存にとって適切かつ正当であるか。それを誰が判定するのか。

古代ギリシアの代表的思想家たちは、知恵ある者が判定者となるべきだと考えた。しかしホッブズは、各人が各自の自己保存のために、何が正しい手段であるのかの判定者だという。

というのは、原理的には知恵者がよりよい判定者ではあるが、知恵者がある愚者の自己保存によせる関心は、愚者本人よりもはるかに低いからである。

ロ、正義

ホッブズはプラトン以来の伝統にしたがって、社会構造の根本原理を正義とした。ところが、彼はアリストテレスの配分的正義を無視して、交換的正義を換骨奪胎し契約の遵守としてうけついで。

ホッブズは『リヴァイアサン』の15章で正義・不正義について、次のようにいう。

自然法のなかに、正義の源泉 justice と起源がある。なぜなら、なんの信約も先行しなかったところでは、なんの権利も譲渡されていなかったのであり、各人はあらゆるものに対する権利をもち、したがって、どんな行為も不正ではありえない。しかし信約がなされるときは、それを破棄するのは不正である。不正義の定義は、信約の不履行にはかならない。

そして正義を交換的正義と分配的正義にわけ

それは、売買・賃貸借・貸借・為替取引・物々交換・およびその他の契約上の諸行為

における信約の履行なのである。そして分配的正義は、仲裁者の正義、いかえれば、何が正しいかを決定する行為である。

「人々は自ら結んだ信約を履行すべきである」という契約に関するホッブズの考えは、「市民社会における法規範の原則」を示すものである。

以上のように、ホッブズは、正義を、交換される事物の価値が客観的に等しいか否かに無関係に、契約の遵守に求めた。ギリシアの代表的思想家たちの正義論は、アリストテレスの「交換的正義」に典型的に示されるように、交換される事物の価値が実際に等しいことが要求されるのである。

換言すれば、交換されたものが価値的に等しい場合に正義が保障されるのだ。

ハ、倫理

ところで、ホッブズの自己保存の権利は、倫理の内容に変化を与えた。ホッブズによれば、アリストテレスの倫理説には、他のすべての徳を包含する二つの徳がある。高邁と正義である。前者は個人の卓越性に貢献する限りで他のすべての徳を包含し、後者は人間が他人へ奉仕するのに貢献する限りで他のすべての徳を包含する。

したがって倫理学は道徳性を高邁か正義かに還元することができる。第1の道はデカルトが、第2の道はホッブズが選んだ。

ホッブズでは自己保存は平和を求めるので、倫理は平和が実現されるために遵守されるべき規則の総体となる。彼は、最高の徳を平和愛好としたので、平和愛好と直接的・一義的關係をもたない古代ギリシャの代表的思想家たちのいう人間的卓越性—知恵・勇気・節制・高邁・寛厚—は、徳ではなくなった。

正義（衡平および博愛とともに）は徳でありつづけたが、前述したように、その意味は契約履行の習慣と同じものとなった。正義は、最早、

古代ギリシャの代表的思想家たちの主張する、人間の意志から独立した自然の法に従うことではなくなった。

さらに、悪徳は放埒や魂の弱さという人間の卓越性の欠如でなく、虚栄心などの他人への侵害となった。

また、善き生活とは、人間的卓越性の生活ではなく、厳しい労働の報酬をえて「便利な生活」をすること。統治者の義務も「市民たちを善良にし、高貴な事柄の実行者に育てること」ではなく、「市民たち(の)……安楽に役立つことを豊富に供給するように法律によって可能なかぎり努める」ことに変わった。

ホッブズについての私のメモ

ホッブズのいう欲望は、次から次へと限りなく拡大し、ひとつの欲望を遂げ終わると、さらに新たな欲望へと人を駆り立てていく。

ホッブズによれば、自然権 *jus naturale* とよぶ自然の権利 *right of nature* は、各人が彼自身の自然すなわち彼自身の生命を維持するために、彼自身の意思するとおりに、彼自身の力を使用する自由をもち、彼自身の判断力と理性において、最適の手段と考えることをおこなうことができることである。

したがって、自然状態では、個人は自らの理性で自分を統治する。個人の主観的判断が「万人の万人に対する戦争」をうみだす。戦争状態はたとえ自由があっても好ましいものではない。戦争状態では、「勤労の果実が得られる保証がないため、働く理由がなく、したがって土地の耕作も、航海も、海路で輸入される財貨の使用もなく、快適な建物も、多大の力を要する物を移動させたり、再移動させる道具も、地表に関する知識も、時間の計算も、技術も、文字も、社会もない、そして最も悪いことには、絶えざる恐怖と暴力によって死ぬ危険があり、人間の生活は低級で貧しく険悪で残忍で、しかも短い」

(13章)からである。

ホッブズによれば、このような絶えざる恐怖と恐るべき死の危険に直面すると、人間の理性と死の恐怖の感情は、自然権を捨てて平和を求める。「平和の原理」こそが彼の社会契約説の根拠である。

では、国家の成立によって、個人の自己保存欲はなくなるのであろうか。たしかに戦争状態はなくなるであろう。しかし自己保存欲はなくなるのではない。逆に、自己保存欲は法の範囲内であれば、国家によって認められ公然と実行できることとなる。

彼では、正義は人間の個々の営みを超えた普遍的な理法(自然的生)ではない。正義とは人と人の信約の履行である。ところで現実の社会では強者の自己保存欲が、信約の内容となるであろう。結局のところ、信約の遵守こそ正義とは、弱肉強食の正当化を意味することになるのではないか。

力には二つの意味がある。力能 *potentia* と権能 *potestas* である。

人間の力能とは、何を人間はすることができるとのかであり、権能あるいは人間の権利は、何を人間はすることが許されているかである。

『自然権と歴史』 レオ・シュトラウス 塚崎智・石崎嘉彦訳 昭和堂 1988年

Leo Strauss, *Natural Right and History*, 1953.
『リヴァイアサン』 ホッブズ 水田 洋訳 岩波書店 1954年

Thomas Hobbes, *LEVIATHAN*, 1651.

健やかに

満二歳の女の子

おねだりが 聞いて貰えないと

家であるうと スーパーであるうと

チベットの巡礼者のように腹ばいになり

手と足をまっすぐ伸ばし 五体投地をする

巡礼者は すぐ立ちあがり 二三歩あるいては

願いが叶えられるよう 経文を唱えながら

また大地に身を倒し 五体投地をくりかえす

女の子は 願いが かなえられるまで

腹ばいのまま オカッパ頭をふり

顔を真っ赤に 泣き叫ぶ

家具売り場の机にかけよると

たどたどしい手つきで 靴をぬぎ 椅子に腰かけ

ジャンパーを 四苦八苦でやっと脱ぎ

五体投地のご利益^{りやく} アイスクリームを取出す

可愛らしい舌で ちょいと舐めては

汚されないかと 心配している店員や

まわりの華やかな陳列を おもむろに眺めている

座布団を壁にあてがい 両手を押しつけている

か細い手足に 満身の力をこめて 突っ張っている

息をつめ 膨らんだほっぺた紅潮さして

しばらく押しつけていて もう良かるうとばかりに 手を放す

座布団は 畳の上にとんと落ちる それ見て笑ってる

また拾いあげ 壁に押しつけては 手を放し

落ちるのを笑っている

あどけない豪傑 腹を抱えて笑っている

幼女の 秋晴れのような高笑い

上野山 定由(会員)



顔回の枢

やすい ゆたか（会員、講師）

このひとの為にではなくてたがために
慟哭するや回逝きし朝

顔回が死んだ！師の孔子役は榭周次である。「天、予（われ）を喪（ほろぼ）せり。天、予（われ）を喪（ほろぼ）せり。」榭は身を振じらせて、激しく泣いた。つまり慟哭したのだ。

先日息子の鯉が死んだ時には号泣はしたが、慟哭まではしなかった。お供をしていた二五歳の有若はこの孔子の姿を見て驚いた。何故なら孔子の教えでは肉親の情というのが大切に、他人への情はそれを押し広げていくべきものである。だから息子の鯉を慈しむように、弟子の顔回を慈しむべきである。

そこには当然順列というものがある。息子の死以上に弟子の死を嘆き悲しむなど、孔子自身の教えからは考えられないものだ。「先生、身悶えして激しく泣かれていましたよ」と有若に言われて、孔子は「この人のために慟哭するのじゃなかったら、誰のために慟哭するのか」と応えた。

孔子（前五五一～前四七九）で、顔回（前五一四～前四八三）だ。つまり孔子が六八歳の時に顔回は三八歳の若さで死んでいる。若死にすることを特に夭折というのである。肉親の情を第一に考えるという孔子が他人の顔回到肉親以上の愛を示したというのには、それなりに理由がある。

仁義切る任侠道に露ほどに
儒家の魂継がれまほしを

顔回は孔子より三七歳若い。孔子の塾つまり孔門にとって若手のホープである。一を聞いて

十を知るといわれた秀才中の秀才である。孔門は、現在考えられるような知識を教え込む学塾ではない。六芸を教えていたのである。六芸とは周代に士の必修科目とされていたと言われる「禮・樂・射・御・書・數」である。「御」は乗馬、「書」は読み書きから文献研究まで、「數」は計算から会計までを意味する。]

特に祭礼での歌舞音楽の練習が大切だった。というのは、儒家は宮廷の儀式から一般家庭の冠婚葬祭まで一切を取り仕切る巫祝集団でもあったのだ。孔門は月謝をとっていない。月謝という制度は近代的なもので、初めて月謝制度を導入したのが福沢諭吉の慶応義塾だったといわれている。入門時や年に何回か挨拶として食物や衣料などを束脩として収める慣習になっている。

これが収入のすべてでは、塾の運営はできない。儀式や冠婚葬祭を周礼にのっとり行うことを請け負って、そこで振る舞いや謝礼を受けていたのだ。ようするに玉姫殿とか葬儀屋とかなんとかセレモニーや興行の請負を兼ねていたわけである。

興行を生業にしていた連中を「興行やくざ」というが、「やくざ」と儒家は決して無縁ではない。「やくざ」というのは蔑称で本来は「任侠」という。彼らは独特の挨拶を「仁義を切る」というが、仁義こそ儒家がもっとも大切に考える徳である。任侠の人々は自分たちの源流を孔子たち儒家の集団だったと考えているのである。しかし現代やくざが果たしてそのことを自覚しているかどうか、そのかけらも見られないようなのが残念だ。

井田の法を守りて封建の

秩序固めむ礼楽用いて

儒家の思想は、周代の古き良き封建制の秩序を回復し、社会を安定させることにある。周の王室があり、それによって各国に封じられた諸侯が、それぞれの国を治めていた。諸侯には卿とよばれた重臣がいて、それぞれの国内の地域を治めていた。そしてその下に大夫や士がいて、いくつかの集落を治めていたのである。

そして集落は八つの戸が単位であり、井田法に基づいて耕作していた。つまり田を九等分に区画し、各戸は一区画を耕して、その収穫を自分のものにする。そして残りの一区画は共同で耕作して、その収穫は領主に貢納するのである。この秩序が守られている限り天下は泰平だというのが儒家の捉え方である。

ところがこのような封建秩序を固定し、維持続けるのは大変難しい。それぞれの家には栄枯盛衰があって、やがて周室は名前だけの存在になっていた。諸侯は自分の領国を勢力圏と考え、独立国の王のようになってしまう。

とはいえ諸侯も勢力が衰えた者が多い、有力な重臣である卿に実権が握られていたのだ。また卿の権力も大夫や士の中から成り上がった者達に脅かされていたのである。こういう傾向を下剋上と呼ぶ。成上がり者達は、周礼を軽んじ、古くからの身分秩序を無視して、分不相応な儀式や祭礼を行い、権勢を誇示しようとした。これではことを実力で決しようとして争乱の世の中になっていくのは必定である。

そこで儒家たちは正しい礼を復活させ、古い身分秩序に戻して社会の安定を取り戻そうと考えたのである。それで彼らは既に衰退していた周の時代の礼楽を復興させる文化運動に取り組んでいたのである。だから孔丘は巫祝と呼ばれた祭礼を行う集団出身であったと推測されている。

義に篤き清廉の士を用うれば

君主いかでか羽をのばさむ

孔子たちの文化運動は周の王室を尊んで、諸侯たちを纏め上げ、北方の騎馬民族からの脅威に備えようとする有力諸侯の意向にも沿っていた。それで孔子たちは六芸に秀でた人材を養成して諸侯の家臣に取り立てさせようとしたのである。

ところが儒家を登用するについては、反発が強い。諸侯は成上がってくる卿や大夫や士を牽制するのに儒家を利用するのだが、当然新興勢力は儒家を排斥しようとして、紛争が起りがちである。それに儒家は礼に厳しいから仁や義を重んじない諸侯の政治には批判的であるし、礼楽をきちんとすればかえって出費がかさんでしまう。

顔回のような秀才はかえって敬遠される。顔回は非常に義や礼を重んじるので、彼を登用した諸侯はわがままかたてな政治ができなくなってしまふ。権力者は必ずしも人民のために政治をしようとは思っていない。自らの権力の保持と強化を狙っているのであり、人民の幸福のために政治をすべきだという顔回とうまくいくはずがないのだ。だからいつまでたってもどこからも顔回に宰相になって欲しいというお呼びはかからないのだ。

もちろん師の孔子も諸侯から敬遠されてしまふ。故国の魯国で大司寇にまで出世し、政治の実権を握って、重臣たちを抑えようとしたが、逆に魯国から追放されてしまった。それから各地を放浪するが、各国とも孔子の話は聞いても登用しようとはしなかったのである。

人愛すことが仁だと言われても、

愛の意味知る人はいづくに

知らざるを教ふがよき師あらざりき知りたることを教ふにしかず

硬い話ばかりで、お待たせしました。いよいよ上村陽一君の顔回の登場である。総白髪顔面の皺は深く、五十歳過ぎに見える。苦渋の表情での登場だ。「先生、お伺いしたいことがあります。一体仁とは何でしょうか。」榊は唐突に訊かれたので訊き間違えてしまった。「ジか、あれは辛いな。痛くて歩くのさえまならないし、便所では死ぬほど苦しむものだ。」「それは痔でしょう。私が伺っているのは人偏に二と書いて仁です。先生がいつも一番大切だとおっしゃっておられるあの仁です。」

「何をおっしゃる兎さん。そんなことあなたが一番ご存知でしょう。私は他の弟子たちにどのように仁を教えていましたか、思い出してみてください。」「樊遲さんが仁は何かと問われて、先生は人を愛することだと言われましたね。」「彼は本当に優しい人だからね。人のために尽くして、それで喜んでもらえたらすごく幸せそうに微笑むじゃないか、だから人を愛することだと言ったら、わが意を得たりとばかり得意げにしていたじゃないか。」

「仲弓さんには『人に会うときは大切な賓客に会うようにし、人民を使うときには大切な祭りをを行うかのようにし、自分の望まないことは、人に仕向けないようにしなさい、そうすれば国に居ても怨まれないし、家に居ても怨まれない』と具体的に説かれましたね。」

「確かに仁とは人を愛することでもいいのだが、それはどういうことなのか、漠然として分からない人にはこうすることが人を愛するということなのだ」と説明してあげる必要がある。その際はその人がどんな仕事をしていて、その際どういう気配りが大切なのかを説明すると、納得してもらえるのだ。」

「そのおかげでしょうか、仲弓さんは季孫氏という魯の実力者の家に取り立てられました。そしてそこで信頼を集めておられるようですね。」

「いやとんでもない。私が教えてあげたから、そうできるようになったのではありませんよ。」

元々仲弓さんはよく気配りが効く人で、いつも相手をおろそかにしていないか、どうすれば相手に嫌がられないで、明るい気持ちにさせることができるかに心をくわいている人だから、それで私の言葉が気に入ってくれただけなのだよ。」

陽一はなるほど、よい先生というのは、相手の知らないことを教える先生ではなくて、相手が一番よく知っていて、一番大切だと思っていることを確認させてあげる先生なのだな、これはすごいことを教わったと感心した。

「先生、なるほど、そうですか。相手の知らないことを教えても、何を難しいわけの分からないことを言う先生だと敬遠されてしまいます。それに対して、相手が常々考えていることをよく観察されて相手の身になって考え、相手が一番納得できることを言ってあげると、この先生のおっしゃることはよく分かる、この先生が一番すばらしい先生だということになるのですね。」

孔子を扮している榊は満面の笑みをたたえてうなずいた。「そうなんだ、さすが顔回君は一を聞いて十を知る逸材だね。だから教師こそ、生徒の身に成って考え、生徒から学ばなければならないということなんだよ。」

吾道はただ一筋に貫きぬ

篤きまごころ思いやりのみ

「ですから真心とおもいやりが大切だということですね。曾参君が大先生の道は結局忠恕に帰着すると少年たちに教えていました。」

「そういえば曾参に、私の道は一つのことを貫いてきたんだといったら、そうでしょう、そうでしょうとうなずいていたな。彼ぐらいになると何も言わなくても分かりあえるんだよ。」

「まったく曾参君ほど誠実な人はこの世にいませんね、先生を除いては。」

「何とおっしゃる兎さん。私なぞはまだまだ欲

の塊で、心に悶々としたものを抱えているので、人に誠実にしようとしてもついおもいやる余裕を失っている自分に気づいて、余計に落ち込んでしまうことがある。曾参の爪の垢でも煎じて飲みたいぐらいだよ。」

なんと孔子ともあろう大聖人が自らの心の弱さに自己嫌悪に陥り、もがき苦しんでいるとは、そんなことがあるだろうか、顔回は思わず耳を疑った。「そんなご謙遜でしょう。先生にそんな悩みがあるはずがありません。」

「ハ、ハ、ハ、ハ。それじゃあ、孔門でもっとも秀才だと尊敬を集めている顔回君は何の悩みもないのかね。」陽一は、顔回の心の奥底の苦悩を見抜いている孔子の鋭くしかも優しい眼光にたじろいだ。そして「それは:::」とつぶやいただけで何も言えなくなった。

貧しさも楽しみのうち回ならば
道なき時に富たるは羞じ

しばらく沈黙してから、陽一は自嘲気味に口を開いた「先生はこうおっしゃっておられるのでしょうか。『えらいもんだなあ回は。一椀の飯に一椀の汁で、むさ苦しい路地裏のあばらや住んでおる。普通の人なら貧乏に堪えられず、愚痴をこぼす所であろうが、回は愚痴一つ云わず楽しそうに暮らしている。大したもんだ回は』と。そんな風に言われていると弱音は吐けませんからね。」

「それはすまなかった。たまには弱音を吐いてくれてもいいんだよ。貧乏生活でガリガリにやせて、弱冠二十歳ですっかり白髪に覆われていた。病気になるかと本当に心配だよ。もっと栄養になるものを食べないと、我が家で食事をしていってくればいいのに、遠慮していることをきかないからね。」

企んで国を奪いてその後には
徳で治めるそれも不可なり

「貧乏はそれほど苦しいことはありません。それよりせっかく先生から大切な学問を学んでいるながら、それを思う存分活用することができないのが、なんとしても口惜しいのです。一体どうすれば先生の素晴らしい学問を活かすことができるのか、それで本当は笑顔の裏では悶々としているのです。」

陽一は感極まって涙が溢れそうになるのをじっとこらえていた。こんな時は声を上げて泣くべきなのか、じっと涙をこらえるべきなのか、泣くのはやはり不様な気がした。

『人に知られないからと言って慍みごとを言わない。これこそ君子じゃないか』と私は常々言っているだろう。それはもちろん正しいのだが、やはり自分の力を存分に発揮して、苦しんでいる民を救い、よい国づくりをしたいじゃないか、それができないのは何としても口惜しい、その思いは私とて同じことだよ。

だから私もあせって、言ってることはさかさまの随分恥ずかしいことをしてきたじゃないか。しかしね、やはり少々冒険を犯したり、道にはずれても権力を握って、それから徳を発揮しようとしても決してうまくいかないということだ。

しっかり徳を守り、決して礼に外れたことをしない、結局それが一番正しい生き方なのだ。小賢しい企みで権力を奪っても、悪だくみにかけては相手の方が我々より勝っているのだから、結局陰謀でこちらが権力から追われることになるのだ。」

「それはよく心得ているつもりなのですが、しかし、学問という民衆のための宝を身につけたまま、このまま立ち枯れていくのかと思うといたたまれないものです。」

時待たず狼煙をあぐることよりも
命の舞に哀しみ燃やさむ

「とんでもない、君は立ち枯れてなどいない。そんな悪あがきをするよりも古の麗しい舞を舞うことの方がはるかに大切なのだよ。そうだ久しぶりに、舞の稽古をつけてあげよう、私の笛にあわせて舞ってみてくれないか。」

陽一は舞など舞ったことがないから大いに戸惑った。何しろ舞と踊りの区別もしらない。舞なら上半身を動かさないことになっているらしい。何しろ中学校で体育祭でやったヨサコイしか踊れないので、若者の乗りで元気いっぱいのヨサコイを踊った。

「古の商の都で収穫の秋に大地の神に捧げた命の舞だ。見事じゃないか。全く礼にかなっている。」榊はご満悦の様子だった。「回君は実に楽しそうに踊っているね」

「はい、この舞を舞っているときには何もかも忘れて、体の芯から燃えてきます。」

パチパチパチ、拍手をしてから孔子は言った、「登用されても、君主に気に入られようとして、仁にかなった思いやりの政治をおろそかにしてはならない。礼にあらざれば見るなかれ、聞くなかれ、言うなかれだ。たとえ登用されなくても、礼に適った正しい舞を舞っている限り、そこに世界の中心があり、そこを中心に歴史は動いているのだ。」本物の顔回だとわが意を得たりかもしれないが、陽一にはよく飲みもこめない。

「礼楽を整えることが政治の基本だと我々は説いてきた。人間も生き物だから、欲望を充足させて生きている。獣たちは本能の命じるままに行動すれば、それで自然のバランスが取れて他の生き物や、同類ともうまく共存できるようになっている。ところが人間だけは、欲望が限りなく肥大するので、欲望の充足の仕方にも型をはめて自然や同類とのバランスを保てるようにする必要がある。」

だから法や礼というのは、決して欲望を否定するのではなくて、充足の仕方を伝統を基準に良い形に保とうとするものなのだ。どうせ欲望を充足させるのならできるだけ楽しく、満足で

きるものにしたほうが良い。そこで音楽に合わせて、舞を舞うことによって神々や人々との対話にすら、最も楽しくて最も美しい形を追求しているのだ。」

「としますと、政治というものは民衆が楽しく舞を舞い、歌を歌えるように、日々の生活の楽しい過ごし方を教え込むことなのですか。」

「それは近い。ただそういう法や礼はこちらが勝手に制定できるものではないだろう。伝統を掘り起こし、今によみがえらせるべきものだ。それは民衆の中に埋もれている。だからこちらから一方的に教え込むのではなくて、民衆に教わることも大切なのだよ。」

「でも礼楽にばかり嵌ってしまいますと、現実の政治の課題を見落としてしまいませんか。」

孔子は苦笑しながらうなずいた。「何事も程度を考えなくてはならないからね。礼楽が大切だといって、それに精力や財力を注ぎすぎると、財政を破綻させることにもなりかねない。」

礼楽は身分によってどうするのが決まっているから、礼楽をきちんと整えれば、身分がはっきりして世の中が安定するのだ。そして何事も礼楽のように楽しくバランスを考えて、美しく行うことが大切だと分かる。

だから今こうして顔回が美しく、元気に楽しく踊ったということが、すべての人々にとって、もちろん政治を行う上にも大切なお手本となっているのだ。」

「つまり今の世の中は乱れていて、政治に首を突っ込むと必ず、陰謀にはめられたり、悪に染まったりしなければならぬので、正しい思想と正しい礼楽を守り、それを伝えることの方が意義があるのだということですね。」

取り立てられて大きな屋敷に住み、礼服を身にまとい、ご馳走をたらふく食べているよりも、陋巷にいて破れた小屋に住み、つぎはぎだらけの服を着て、粗食をいただいているほうがはるかに素晴らしい生き方だということですね。」

「そうなんだ、顔回よ、誤解してはいけないよ。」

宰相になったから偉い、天下を取ったから偉いわけでは決してないのだ。また人民を救うのは、宰相になったり、天子になることによってではない。それなら過去の宰相や天子が果たしてどれだけ人民を救ってきたか、大部分の連中は威張り散らして、自分の権勢を強め、私欲のために人民を苦しめてきたのではなかったか。そんな連中より、われわれの方が本来の政治のあり方を正しい礼楽を守り伝えることで示し、それで未来の人類全体を救っていると言えるのだ。そう思って舞を舞い、音曲を奏で道を説きなさい。そうすれば我々の一つ一つの手の上げ下ろし、一つ一つの言葉が黄金に輝くのだよ。」

背を伸ばし、まことの道を一筋に
生きることこそ王道ならずや

「では礼に適ってさえいれば、背筋を伸ばして歩いたり、花を美しく飾ったり、字を力強く書いても、おいしく梅干を作っても、人類を救うということになりませんか。」榊はニコニコ笑って答えた。「全くその通りなんだよ。私が仁だと言ってるのも、特別なことじゃない、真心と思いやりの気持ちを忘れないようにと言っているだけだ。だから一人ひとりの民が日々これを行っている。その積み重ねが素晴らしい世の中を作るのだ。私たちが特別に偉いわけではない。ただ我々はそれを政治や道徳の原理として住みよい社会を作ろうと唱えているだけなのだ。だからこそ我々の考えはやがてみんなに受け入れられて、中国で数千年の間支配するようになり、我々の名も語り継がれることになるだろう。」

「それじゃあ悶々とししないで、この清貧の陋巷での生活を楽しみ、礼楽のお稽古に励んでいれば、それが先生から学んだ学問を十分活かしていることになるのですね。しかしそんな慰めを言われても、胸に学問を収めたままでは、この空しさは張り裂けんばかりです。」

「回さん、あなたはこれまでも胸に激しい苦悩

を抱きながら、そんなことを全く感じさせないように、まるで清貧を楽しんでいるように見えていた。つまりずっと己のわがままを抑えて礼にかえてきたのだよ。『克己復礼』だ。立派に克己復礼をやってこられた。そしてこれからもそれを続ければよいのだ。もっとも学問が深まれば深まるほど、身を立てたいという気持ち、野望が膨らんできて克己復礼は難しくなるものだが。

回、あなたの克己復礼は、はっさん熊さんが放蕩ばかりしていたのが、嫁さんをもって心を入れ替え、急に働き者になったというような克己復礼とはわけが違う。そんなことでだれも仁に目覚めたりはしない。ところが本当にあなたのレベルで克己復礼ができたなら、世間の人はみんな感心して、天下が仁になつくだろう。」

顔淵は陋巷のまま骸なり、
賢なればこそ厚く葬る

顔淵が死んだ。門人達は身分は賤しいけれど人物は大変立派だったので、それに相応しく顔淵を厚葬したいと思った。特に願回の指導を受けた曾参たち若手が孔子にお願いにつめかけた。曾参は若くて美しい顔をしていた。三輪智子が曾参を演じている。榊周次は女性を登場させる余地がないので、三輪智子を遊ばしておくわけにもいかず、曾参役に起用したのである。

「孔先生、私たちは顔淵先生を尊敬しております。彼は孔先生に次いでこの孔門の看板を背負っておられました。人物としてはどこの国の宰相に取り立てられても、不思議はないほど立派なお人柄でした。君子の徳は十分に備えておられました。でも残念なことに時代が悪く、清廉潔癖なお人柄ゆえに用いられることはありませんでした。でも顔淵先生はすこしも恨み言を言わないで清貧を楽しんでこられたのです。孔先生のお教えでは尊い志をもつ賢者を尊ぶべきだということです。我々が先生を厚く葬って、世に

入れられなかった顔淵先生の遺徳をたたえなければ、とてもやるせなくてたまりません。」智子は大粒の涙を流してヒューヒューとしゃっくりあげて嗚咽しました。

孔子を演じている榊周次は、智子のオーバーアクションには手を焼いた。「曾参君、君の顔回を慕う気持ちは良く分かる。顔回こそ孔門を立派に引き継いでくれると嘱望していたのだから、厚く葬りたいと言う気持ちは私もだれにも負けないつもりだ。しかし、彼には礼にあらざれば見るな、言うな、行ふなと常々人の道を説いてきたのだ。儒家の考えは封建的な身分秩序をしっかりしたものにして、世の乱れをなくそうという考えなのだ。その儒家が身分に合わない葬儀をするのは、自らの言ってきたことに反することで、世間は儒家のいうことを信用しなくなる。それでは孔門の屋台骨を背負ってきた顔回自身の考えにも反することだ。顔回は陋巷に生き、陋巷に死んだ。だからそれにふさわしく薄葬で葬ろう。顔回は決して厚く葬られるために清く正しく生きてきたのではない。厚く葬られても決して喜びはしない。自ら薄く葬られる生き方を選んだのだから、彼の意思を尊重すべきなのだ。」

いつもは孔子に説明されると、すぐに納得してしまう曾参だったが、この日ばかりは目を腫らし、オイオイと声を出し、鼻水までたらして泣くものだから、簡単には引き下がらない。「薄葬にすると世間はかえって孔門を信用しなくなると思います。顔回先生ほどの賢者で、孔門に巨大な貢献をしているのに、その恩義に報いようとしな。ただ出身の階層だけで人間の扱いを決めていると。顔回先生の孔門での活躍や貢献からすれば、卿や大夫として弔わないとつりあいが取れません。あくまで孔門の葬儀なので、身分や地位をいうなら、孔門でのそれにふさわしいものにすべきでしょう。」

「孔門としておおいに顔回の葬儀を盛り上げるのは大賛成だ。しかし孔門が世間の身分秩序と大阪哲学学校通信 No40

違うものを独自に採用してしまうと、孔門は国家とは別の国家を立ち上げたことになって、謀反を企てる団体だと疑われることになる。それこそ魯国や諸侯をみんな敵に回してしまうことになる。それはとてもできないし、顔回の意志に反するものだ。」

「それは顔回先生がいずれかの諸侯に出仕されていければの話です。出仕されていれば当然宰相になられていたでしょうから、榊のついた厚葬になっていた筈です。それだけの人物だったことを示さなければ、顔回先生に対する私たちの想いが世間に伝わりません。そのことはとても哀しいことでして、とても耐えられないのです。」曾参に付き従っている十代の弟子たちが、まるで真夏の蟬のように泣き続けた。問題が問題だけに孔子としても怒鳴り散らして追い払うわけにもいかず、途方にくれていた。

顔回が怨みの霊となりたるや

生き写しなる顔路現る

そこに顔回の父顔路が尋ねてきた。孔子は顔回と良く話し合うからといって、曾参たちを帰らせたのである。顔路は顔回をそのまま老けさせた感じだが、顔回が貧窮していて弱冠廿歳で総白髪、相当老けていただけにあまり変わらない印象である。だから当然顔回の幽霊のような迫力があつただろう。上村陽一が再登場である。

「孔先生、お久しぶりでございます。この度は志半ばで息子顔回は逝ってしまい、先生にご期待いただきながら、もう役に立たなくなりました。本当に申し訳ございません。本人もさぞ無念だったことだろうと存じます。」

「え、顔路？本当に顔路なのか？本当は顔回の怨霊でわしに恨み言を言いに来たのではないのか？まるで顔回到きに生き写しではないか。」孔子になっている榊周次は少々怯えているようで、こころなしか体が小刻みに震えている。

「何をおっしゃいます。回は先生からいつも暖

かいお言葉を戴き、大変幸せだと申しあげました。その回には先生に対するご恩返しができないことが最大の心残りでしたでしょう。ほんのかけらほどの恨み言があるうとは、私には信じられません。」

「回、回、お前には本当にすまないと思っている。」孔子はまだ本人だと思っている。「お前が孔門に献身的に尽くしてくれてくれたおかげで、孔門のこの繁栄があるのだ。」

そのお前が、あばら家に住み、ボロを身にまとい、栄養もろくに摂らないで、やせ細り白髪で骨身を削っているというのに、私はどうだ。孔門の代表ということで、立派な屋敷に住み、家財道具から衣裳、毎日の食材にいたるまで、諸侯や豪商をはじめとするさまざまな人々から贈答の品が毎日届いている。おかげで、マンションに五百着ほどの着替えを揃え、お出かけも十台以上の外車を乗り回している。そして毎日の食事も宮廷かおまけのご馳走三昧だ。」

「ストップ、ストップ」顔路は、慌てて止めた。「今は中国の春秋の時代ですよ、マンションも外車もありません。それに孔門の台所もなかなか厳しく、おいしい肉をご馳走になったときなど先生は三月もその味を忘れられないとおっしゃっておられた。着ている物だってたくさん接ぎがあたっているそうじゃありませんか。」

「本当に顔路さんなのですね。」やっと少し安堵したようだ。「それにしても回さんは、風邪をこじらせて肺炎で死んだそうだね。二三日寝込んでいると聞いたが、それがあっけなく亡くなっただろう。よほど栄養状態が悪かったんだよ。」

「何しろ一人暮らしでしょう。嫁を取らしておくべきだったのですが、まだ定職もないのに結婚などできませんといって、独身で押し通しましたからね。」

「何とか定職はないものかと思って、諸侯には顔回存在をアピールしてきたんだが、引き合いがあるのは、新入社員扱いみたいな低い身分しかないのだ。宰相や長官といった役職の話は

願回には一切こなかったな。孔門とすれば我が門第一の秀才を二等兵扱いさせるようなまねはできないから、撥ね付けてきた。こちらの見栄かもしれないが。回は一番下かでもガンバって上にいくからという意向だったらしいけれど。それに顔回の頑張りに孔門が支えられていたこともあり、手放したくなかった気持ちもあって、条件の悪いのを理由に撥ね付けてきたのだ。」

師を慕い命ささげし回のため

せめて御車棺を抱かば

「先生、そんなことは全部回は承知の上で、先生に見込まれていることを感謝していたのですから、少しも恨みになんか思っていないですよ。それより私は、回が先生を命がけでお慕いし、すべてを孔門に捧げたことを先生に認めていただき、その労をねぎらってやっていただきたいだけなのです。」

孔子はホッとした表情になった。「そうですか、そうですか、さすがは顔回の父だけのことはある。顔路さんも生活に追われて、学問が中途半端になってしまったけれど、大切な人の道は立派に貫いておいでだ。誠心誠意で弔わせていただきますよ。」

「ありがとうございます。そのお言葉がいただけて、回は思い残す事はなにもないでしょう。つきましては先生のお体の一部になっているお車を頂戴し、それで回の棺桶を囲む櫛を作らせてください。そうすれば回は先生に抱かれて眠ることができます。回はすべてを先生に捧げたのですから、先生は回にお車を与えてやってください。」

突如、孔子を演じている榊の表情は暗くなり、不機嫌になった。そして不安のあまりおどおどとした口調で語りだした。「そ、それは、それはできません。私はこれでも大夫の位を魯公からいただいております。大夫が行列で歩くとは礼に反するのです。身分秩序を守るといのが儒

家の根本の立場ですから、車を手放すわけには参りません。」

「先生、代わりのお車は回を慕っている孔門の若いお弟子さんたちに作って戴いております。ずっと立派なものが出来上がると存じます。どうぞご安心下さい。」孔子は追い詰められたような表情になった。「そ、そ、それは。それは困ります。あの車は大司寇になったときに魯公から戴いたものなのです。それを弟子の棺桶を包む槨になぞできません。」

顔路はひざまずき、頭を地面にこすりつけて哀願した。「先生、お願いでございます。これだけは聞き入れてください。孔門に嫌がる息子を無理やり入門させたのは、私です。長くは続くまいと思っておりましたが、いつしかすっかり溶け込み、本気で先生に心酔し、だれよりも誠を貫き、礼を尊び、己に厳しい人間になりました。

我が家の困窮ぶりを知っているだけに、私からの援助は一切受け取ってくれません。二十歳の息子が総白髪になったのを見て、どの親が胸を締め付けられない筈がありましよう。家に帰って農業に励むように薦めましたが、志は曲げられない、先生の恩に報いるのだと聞いて聞かなかったのでございます。そして挙句の果てが野垂れ死に同然の始末です。

私は息子のために何一つしてやれなかった。どうかこの親を哀れだと思われるなら、息子の志を賞でてお車で包んでやってください。せめて最後の時だけでもお前は立派な人間だと槨をつけてやりたいのです。何もしてやれなかった、野垂れ死にするのを見殺しにしてしまった、この哀れな父親のためにお願いですから、お車を下さい。孔先生、先生の仁をお示し下さい。」

封建の礼を尊ぶ儒家なれば

身分忘れて槨で囲えず

「顔路さん、あなたも父親なら、私も父親だ。息子の鯉が死んだとき、大夫の子だからといっ

て槨はつけなかった。息子のために車を壊して歩いたりはしなかった。儒家の礼では、まず家族への愛を優先しなければならない。息子にもしなかったことを他人の息子にするわけにはいかない。そんなことをすると家族愛を根本に置く儒教道徳が崩れてしまう。薄情なようだが、私も辛いのだ。回さんを野垂れ死にさせた責任は私にあるのだからね。この罪を背負っていくしかないのだよ。本当にすまなかった。」孔子はひざまずいて謝った。

「先生、どうしてそんなに教義に拘られるのですか。鯉さんは、鯉さん。回は回です。それぞれ一回切りの人生です。鯉さんには槨は必要なかったかもしれない、それは父親として先生が愛情をこめて葬られたからそれでよかったかもしれない。回の場合はどうでしょう。この凄まじい赤貧の人生に対してただ親や師が偉かったと褒めてやるだけで収まるのでしょうか。」

「どうして槨などに拘るのだ。槨がなくなっても、彼の偉大さは変わらない。礼に背いてカッコイイや槨をつけても、礼に生きて願回は喜びはしない、汚された気持ちになるだけだ。」顔路は少し語調を荒げて語りだした。「それじゃあ、こういうことですか、卑しい身分に生まれた人間は、いくら努力をし、尊敬される人間になっても、卑しい人間として槨なしで葬るのが正しい礼で、尊い身分に生まれた人間は、どんなに悪辣なことをしても、尊い人として槨付で葬るのが正しい礼だということですか。」

槨は両手を広げあきらめのポーズをとった。「身分というのはそういうものだろう。その身分制度があるから社会が安定し、平和な暮らしができるのだ、だからそういう割り切れない矛盾があっても、個人的な感情を押し殺して守ることが正しいんだよ。その分愛情の深さで補えばいいのだ。」

「先生は常々こう教えてこられたでしょう。君主たる資格のある人格が君子で、君子が君主になるべきだと、君主たる資格のない小人が君主

になるべきではないと。ところが現実には私利私欲しか考えない小人が君主になって、人民を苦しめている、こういう世の中は改めるべきだ、君子に成れない君主は真の君主ではなく、君子が君主になってはじめて真の君主だと。だから賢人を登用し、身分の入れ替えが必要だということです。だから回のような宰相や君主たるにふさわしい人物を柳なしで葬るのは賢者に対する冒瀆ですし、先生にこんなことは言うの不遜の極みですが、私の信じる儒教道徳からみても納得いきません。」

これは理屈で説得できる相手ではないと孔子も観念した。「父親の君がそこまで云うのなら、喪主の意向を尊重しよう。私の車で柳を作りなさい。ただそんなことをしても気休めに過ぎないし、回も喜ばないとだけは置いて置こう。」

封建の礼を尚ぶ儒家なれど

徳を敬さで礼立ちたるや

さて柳をつけるかつけないか、そんなことは単なるかっこづけだと笑わないで欲しい。身分によってではなく、徳によって人間の尊さを主張していたはずの孔子たちの考え方が、封建秩序の維持のために身分に基づく礼に固執した。そのために徳があるのに卑しい身分で死んだ顔回の柩に柳をつけるかつけないかで、大論争に

なったのである。このことが人間論にどんな関係があるのかって？それは、孔子のあの様子をごらんください。

「回や回や、柳が邪魔になっておまえの顔が近くに見れないじゃないか、私がお前のそばにいってもっと近くで見ていてやりたいのに、私のせいじゃないよ。若い連中が柳などつけて体裁ばかり拘るものだから。柳をつけても人間としてお前が偉くなるわけではない。つけなくても人間としての偉さは私が一番良く知っている。形は薄葬だが、心の中では厚く厚く葬っているのだから分かっておくれ。」

孔子の態度とは裏腹に、孔門としては顔回を清貧に耐えて礼を貫いた高潔な仁者として、特に手厚く葬ったということで、世間の評価はあがった。曾参は少年たちにこう語った。「儒家は封建の制を尊重し、身分に伴う礼を尊重すべきです。しかしそれだけで人間の価値を決めてしまうのは、心に適いません。特に顔淵先生のような偉大な人格はだれもが崇拜し、敬意を表して当然でしょう。そういう場合に特別に扱うということも礼に適ったことであり、そうしてこそ、封建の礼を尊重する美風も保たれるのです。ですから人間を制度や秩序に組み込まれたものとして捉えると共に、その人間の徳から人格を捉えるということも忘れてはならないのです。これが儒家の人間論と言えるでしょう。」

〈知の歴史〉入門講座

ヘーゲル『精神現象学』を読む (第3シリーズ、全3回)

●2月23日(土) ●3月8日(土) ●3月22日(土) 午後1:30～5:30

●尼崎労働福祉会館(阪神尼崎下車徒歩) ●参加費 各回千円(維持会員五百円)

講師・田畑 稔さん(参与、大阪経済大学教授/哲学)

2005年より、19世紀前半に活躍したドイツの哲学者ヘーゲルの『精神の現象学』(1807)を読んでいる。『精神の現象学』は難解で知られるヘーゲルの中でももっとも難解な本であるが、ヘーゲル哲学の誕生を告げる記念碑的な作品であり、哲学の全古典の中でも、読者を魅了してやまない魅力をもつ屈指の傑作であると言える。

また『精神の現象学』には、我々が21世紀の地平で思想を再構築するに際して、「兆候的に」読み取るべき貴重な構想が数多く語られている。講義風でなく、一緒にテキストを読んでいく形で進めたいと思うので、ぜひこの機会にヘーゲルに直接アタックして、哲学的思考を鍛えてみてください。今年からの参加も大歓迎です。

言葉・信念・コミュニケーションの政治学

—天皇制と共産主義運動の分析を例に

- **講師：捧 堅二さん** (大阪経済大学大学院ほか講師／政治学)
- **2月9日(土) 午後1時半～5時半ごろ**
- **尼崎労働福祉会館** (阪神尼崎駅下車、駅西の南北道路を北へ10分)
- **参加費千円** (維持会員五百円)

近代天皇制のもとで、一般民衆は、「万世一系」「万邦無比」「現人神」などと教えられ、天皇崇拝が要求されました。ところが、この天皇制を作った維新の元勳にとっては天皇は「傀儡(かいらい=操り人形)」でしかなく、権力の中核に近い人びとにとっては、天皇も人間であり、日本は数ある国家の一つでしかありませんでした。大学の憲法講義や陸軍中野学校(スパイ学校)でも「天皇国家機関説」が教えられました。

「市民哲学者」と呼ばれる久野収は、近代天皇制のこうした次元に注目して、ユニークな天皇制論を展開しました。「密教としての天皇制」と「顕教としての天皇制」という、天皇制二重構造論がそれです。この理論はたいへん有名なのですが、久野のこの理論が、アメリカの著名な政治学者ガブリエル・アーモンドによる共産主義運動の分析にヒントを得たものであることは意外と知られていません。

天皇制を中心に共産主義のお話もします。できれば宗教についても論及したいです。政治と宗教には共通性がありますから。その際、皆さんとご一緒に、政治の中でのコミュニケーション、他者に向かって言葉を語る人、語られる言葉そのもの、その言葉を聞き、読む人びと、彼らのそれぞれの心の中などについて考えてみたいと思います。

■参考文献 久野収・鶴見俊輔『現代日本の思想—その五つの渦』岩波新書(青版257)1956

大阪哲学学校活動日誌 (「通信」39号発行以降)

2007. 11.10.「大阪哲学学校通信」第39号発行

11.10. 2007年(第13回)大阪哲学学校総会

【第13期運営委員体制】

校長・山本晴義、参与・木村倫幸、笹田利光、田畑稔

運営委員・平等文博(委員長)、伊元勇、中村徹、西山覚、藤田隆正、山口協

11.24.「ゲーテ自然科学と現代」(第1回)……………講師・大槻裕子

12. 8. 同(第2回)……………講師・大槻裕子

12.22. 同(第3回)……………講師・大槻裕子